親ならば少なくとも我が子の写真くらいは撮るだろう。隣室の女は、サキに対してその種の行為をしたことがおそらくないのだろうと、行雄は思ったのだった。

それに、行雄自身にとっても、サキの絵を描くことは単なる暇潰し以上のものになっていた。行雄はサキの絵を描くことを楽しんでいた。いや、はっきりいえば熱中してすらいた。学校に通っていた時分はデザインやカラーコーディネイトの授業が好きで、デッサンなどの地味だが力量の問われる授業は大嫌いだったはずなのに、今の行雄は絵を描くことがこんなに楽しいことだとは知らなかった、とすら考えていた。

自分に才能があるなどとは思っていない。美術学校へ通うことにしたのだって、確固たる目的があったわけではなかったのだ。だが、それがほんとうに自分にとって楽しめることであるなら、才能のあるなしにかかわらず人は絵を描くものなのだなあ、と今さらながら納得してしまうくらい、行雄自身が絵を描くことを楽しんでいるのだった。

そこまで考えたとき、行雄ははたと気付いたのだ。絵を描くことがこんなに楽しいのは、それを喜んでくれる人がいるからなのである。

それに気付いたとき、行雄は妙な感覚に襲われた。恵まれない家庭環境で育ち、絵を描いてやったくらいのことに涙を流して喜んだサキを不憫に思って一緒にいてやっているのだ、などと最初のうちは考えていたが、いつの間にか輪がぐるりと一八〇度回転したように立場は逆転しているのではないか。「不憫に思って一緒にいてやっている」のは、実は

サキのほうなのではないか。

五歳の女の子に対してそんな疑念を抱いた自分が馬鹿馬鹿しく感じられて、行雄は考えを振り払うようにブルッと首を振ってみる。しかしそう思ってみれば、現に今も行雄はサキと向きあって坐り絵を描いている最中だった。二十代も半ばになるいい若い男が五歳の子どもと同じように折り畳み式机に向かい、同じようにスケッチブックに線を描くことに熱中していた。

その上、行雄にとってもサキにとっても、そんな時間が今や生活の中心だった。

行雄は思わず手を止めて、正面にあるサキの顔をまじまじと見つめた。視線に気付いたか、サキがふと顔をあげる。サキの前にあるスケッチブックの上には相変わらず支離滅裂な線が描き殴られていたが、行雄がサキは実際はとても賢い子どもなのではないかと感じるのは、こういう瞬間である。

いつもと同じ、まっさらな、穢れのない感じのするサキの顔をなんだか直視できないような気持ちになって、行雄はわずかばかり視線を落としながら口を開いた。

「なあ……」

言ってはみたが先ほどの考えを口に出すこともまさかできず、行雄は多少唐突に、とっさに考えついたことを言った。

「最近アキちゃん、あんまり泣かないようになったな」